

変わる新宿 あの武蔵野の 「東京行進曲」の時代

「昔恋しい 銀座の柳 ...」で始まる昭和 4 年 (1929) の大ヒット曲「東京行進曲」は、大衆雑誌『キング』に連載された菊池寛の小説『東京行進曲』が映画化された時の主題歌です。その歌詞には、銀座で流行りのジャズやリキュール、ダンサー、オフィス街の丸ビルやラッシュアワー、浅草に開通したばかりの地下鉄など当時のモダンな都会の風俗が見事に唄い込まれています。その四番には「シネマ見ましょか、お茶のみましょか ...」と新宿も唄われました。

ついこの間までの新宿は、炭屋の倉庫が立ち並び荷馬車が行き交うだけの場末の町でした。それがちょうどこの頃から、デパートや映画館などのモダンなビルが建ち並ぶ東京西部の一大ターミナルとなり、その急激な発展ぶりが人々を驚かせました。そして新宿は東京を代表する街のひとつとしてこの曲に登場したわけです。

震災と打ち続く不況

この曲の登場にさかのぼること 6 年前の大正 12 年 (1923) に関東大震災が起こっています。震災は、東京の中心市街であった中央官庁街から下町方面をほとんど焼き、東京という都市にとってだけでなく、日本経済にも大変大きな打撃を与えていました。そして「昭和」は震災から立ち直るための「帝都復興」の声とともに始まりました。この当時の日本の経済状況は、第一次世界大戦 (1914 ~ 18) 後の戦後恐慌に続いた震災の被害を受けて金融恐慌が起こり、さらに世界大恐慌 (1929) と国内の農業恐慌が打ち重なってそれに追い打ちをかけました。農村の疲弊はひどく、都市には失業者があふれ、小作争議と労働争議がひんばんに起こっています。大学生も深刻な就職難で、昭和 4 年 (1929) に『大学は出たけれど』という映画がヒットして、その題名が流行語にもなりました。昭和 6 年 (1931) に満州事変が起こったときには、国内の経済矛盾と危機状況は頂点に達していたのです。

震災と新宿

新宿の急発展は、震災によって商業の中心地であった下町が焼失したために、被害の少なかった山の手へと人々が流れたためです。ちょうど大正頃から新宿を中心に郊外電車網が形成され、その沿線に住宅地ができてきました。新しい山の手形成によって、人々が通勤や買い物・娯楽のために新宿を利用するようになったのです。震災直後は「山の手銀座」という名が、かねてからの商業地神楽坂につけられましたが、すぐに新宿を指す言葉に変わりました。



街 大 宿 新 (所 看 京 東 大 概)
変わる新宿の街 (昭和 10 年頃)

東京三大盛り場通行人調べ

昭和 7 年 (1932) の『アサヒグラフ』に、「東京三大盛り場の人種しらべ」という写真記事があります。これを常設展示でパネルにして、復元した市電の開口部と向かい合う位置に展示しています。この記事は東京の三大盛り場として銀座と新宿と浅草を取り上げ、それぞれの街にどんな人々が集まっていたかを調査したものです。ここで新宿は、盛り場としては老舗の銀座や浅草と肩を並べて扱われるまでになりました。細かい数字は展示を見ていただくとして、それぞれの盛り場の特徴をみると、記事の副題にあるように「洋服の銀座、奥さんの新宿、和服の浅草」の結果となっています。男女の比率では、銀座と浅草が 6 対 4 と男性が多いのに対し、新宿は 5 対 5 と欧米並で日本では珍しいと言っています。その説明として、「新宿は専ら日用品買い出し場の観があります。つまり新宿には経済費入の財布で出るし、銀座へは臨時費か豫備費を消耗の為に出ると云へませう。」と解説されています。当時の新宿は気安い買い物の街で、大きな買い物になると銀座で買うのが一般的でした。そしてさらに、「勿論午後四時過ぎると女の比率が著しく逡減して行くのですが。」と、新宿の夜のカフェやバーなどのにぎわいぶりを暗示する説明もされています。

昭和 10 年頃の新宿

復元した新宿駅前の東京市電には、角帽をかぶった早稲田の大学生と、新宿三越で買い物をした親子と、新聞を読んでいるサラリーマンが乗っています。サラリーマンの読んでいる新聞は、昭和 10 年 (1935) 4 月 9 日の朝日新聞で、満州国皇帝が来日した時の奉迎式の様子や、天皇機関説を説いた美濃部達吉博士の著書 2 冊が絶版にされたこと、またポーランドにおけるナチス党の選挙結果や、上海で日本の対中国方策の現地案についての会議が在中の総領事によって行われたことなどが報じられています。

この昭和 10 年前後の新宿の街を、常設展示『昭和初期の新宿』で再現しています。満州事変以後の中国侵略によって 10 年頃の東京の街は、一時的な軍事景気に潤っていました。

とりわけ新宿は不況の頃でも、「不景気の歓声も此所ばかり他郷の空にもひとしく、一向影響して居らない」(「東京市広報」昭和 6 年 (1931) 3 月 3 日)とされていました。新宿は、学生とサラリーマンの街とも言われ、わずかに残された欧米文化への窓であった武蔵野館や昭和館などの洋画の映画館や、軽い社会風刺と踊り子のレビューを売り物にするムーラン・ルージュ、ジャズで踊るダンスホールや、赤や青のネオン瞬くカフェ街、モダンに変身した新宿遊廓などに人々が集まっていました。そうした当時の新宿のことを、「少くとも其処の一廓だけでは、末世紀奢侈頹廢の夢が、酒と躍りの狂乱に黄金の雨を降らしている」(「東京市広報」昭和 7 年 (1932) 10 月 18 日)とも書かれています。大不況と聞こえてくる戦争への足音に対する不安から一時でも逃れ安息したいと願ったのは、時代に敏感なインテリ層であり、不景気と失業に苦しむ労働者たちだったのです。昭和 12 年 (1937) に日本は、盧溝橋事件によって中国への全面戦争に突入します。そして自由で民主的な動きはすべて弾圧されていきましたが、そうした時代にも新宿の街は、人々に気軽に大衆的な娯楽を提供し続けていったのです。



三越裏のカフェ街の模型